

博物館 アラカルト 18

●浴恩園の大明梅

文化十二年（1815）二月五日、江戸は前日まで降り続いた雪が降り止みました。その日の午後、神辺の儒学者・菅茶山かんちやざんは築地にある浴恩園よくおんえんという庭園まつだいらさだのぼへ向かっていました。浴恩園は、現在の築地中央卸売市場あたりにあった白河藩の下屋敷です。松平定信（1758～1829）が、江戸湾の水を引き入れた回遊式の庭園を造り「浴恩園」と名づけました。

松平定信は、御三卿・田安宗武の七男として生まれ、八代将軍吉宗の孫にあたります。安永三年（1774）に白河藩主松平定邦さだくにの養子となり、天明三年（1783）に家督を継ぎました。同七年には老中首座に就任して「寛政の改革」を行ったことで知られています。

定信は茶山を招いた理由を『花月日記』に「林大学頭じゅっさい（林述斎）が詩（漢詩）は茶山、文（漢文）は広瀬蒙斎もうさい（白河藩士）と称している人なので、この浴恩園の詩を作ってもらうために招いたのだ。」と記しています。

この招宴で二人は対面し、互いに酒を飲み、詩や歌をつくりました。定信は帰郷を前にした茶山に「故郷をおもふもしばしなぐさめよむめ（梅）の色香はよしあさくとも」という和歌を贈り、茶山は三首の詩を作りました。そして、茶山は和歌とともに定信が手折った梅を賜っています。この梅を「大明梅」といいます。その梅の姿を描いたものが、黄葉夕陽文庫中の「浴恩園圖並詩歌卷よくおんえんずなりびにしいかかん」に収められています。描いたのは、白河藩御用絵師・星野文良ふんりょう（1781～1829?）です。文良は、谷文晁一派の画師として定信の文化事業の一端を担った人物でした。その絵に同じく白河藩士の田内月堂による説明が加えられており、「（定信が）手折った梅の姿をここに描かせた。」「白い花は八重であるが、近くに寄ると少し赤みがかっている。この梅はその昔江戸城へ（家康が）やってきた頃、舶来の梅だということで長崎から運んだものを吹上の庭に植えたのがこの梅（の先祖）であると聞いている。」と説明文が加えられています。

浴恩園は、回遊式庭園で「春風の池」「秋風の池」の周辺に四季折々の草花が植えられていました。この梅は春風館の近く楊柳亭ようりゅうてい付近に植えられていたもので、その近くには浴恩園五十一勝の魁春園かいしゅんえん（色香の園）があり、茶山は魁春園の詩を詠んでいます。

浴恩園は、文化十二年に火災により焼失しました。もうその姿をみることは出来ませんが、私たちは先人の残した「資料」を通して当時の浴恩園の姿や当時の交流を知ることができるのです。

（主任学芸員 岡野将士）



大明梅（星野文良画）

